



改正
初學

初學古原狀指方齋藏

十	今川	狀	同	返	狀
二	優	越	狀	同	返
八	舍	狀	納	進	狀
	女	慶	狀	本	書
	熊	谷	術	書	我
					狀



排三所之推厥
定頃年以等有
平指國者皆願
四海烟亂萬民
是近佛法之怨
五法之教義付
苟生弓馬之家
終結其業
案波暴惡不能
願恩惠但運於
天道拋身於國

家誠記義兵
欲退凶徒和國
我陸合而
陣亡卒未以反
勇怕區心不
一陣卷旗我
揚忽拜三所和
光社極機感死
熱的也凶徒海戰
每款款以淚
魏湯伯深行就

一 小過軍不違紀的
一 令仍死罪事
一 大科米米為具忠貞
一 沙法被官免多
一 貧民令沒傷社
一 極榮死事

一 先祖之山不增
一 破壞莊私完事
一 君父室因令忘靜
一 忠孝櫻事
一 公務重私用
一 不怨天乃働子

中曾父系漢英
 与義家流附为
 宗廟氏族自号
 名於八幡左親其
 为其國者亦
 由教者仲为之後
 亂傾首事冬紀
 此史功也如此則安
 兇惡測區海怒
 幅柳芥之草陸
 始为國者君

一不存活下善恩
 不正賞與事
 我如知信下働悉
 又可为同者多
 企自乱支况以他
 人熱樂身事

經之合る成る
 為る石記之志
 社感在定憑哉
 悦伏於空歌
 加威靈神与力決
 持一耐返怨四方
 独則一册新叶
 其其成加護先
 候見一瑞相事
 源義仲
 教旨
 壽永二年三月廿日

一失他人理致盤
 中慕方控感事
 一不知身分限或
 道分或事是事
 一嫡賢后老佞人
 致非分沙法事

西塔武新坊
各受勅進法

史信以天恩教

主秋月臨涅槃

雲生起長夜永

愛無可終之人愛

中須帝以存濟

名若甘野

聖武皇帝別

寂也婦人云慕

難止河泣荒眼



淚費玉難思

善海建立意

遮那佛筒徑

靈場悲絕而後

靈房主源勅を

徳國一紙半錢

孝服之業此

一非道而不善法當正

踏向意不可輕事

一長酒宴拖與務

負忘家賊子

一迷已利根純万

端如他人事

一人來則橫虛病

不能對面事

一好獨味不能施

人之隱居事

一武具衣裝已過分

而片下月見者

世濟之民樂為
來而之產教千
蓮花上老平
由命想首教白

東大寺沙門

曾我狀回返狀

今月廿八日夜於
富士野之精坊之
涉陣曾我十郎
祐成回入家時教
巧謀殺押寄活

不之涉陣何處
國臣人之者在無
尉祐經傳お玉
任人吉備玄土
若同殺害云云
甚以奇怪之次
才之仍死殊哉



一出家沙門尤致者
崇不可正礼義多
一貴賤不存因果之
乃理住安樂率
一於分國立法関令
於姓是種人事

存奈之當之是人心
百有就者本武士道
亦疎之固者之物以傳
一也先之將國事意同
不亦成以乃之方也
外軍亦未長形之也

其方沈沈金元
小波并舍牙祥
隙坊同心之者
有之向不也
昨日之石進之
心也仍与執達
如件
建久四年正月十日
年三系時
为我在新版
同返水

去晦日法教書
今月三日
謹白梅之世世沈
抑小波并祥師
坊等石夏小波
即名系於石徑
之也承及之格列
以序使者之言
祥師坊之流人
之方不知仍方以
同返及石進之

時相傳乃為家業繼初慈友不
下有以明於方決之為人依
善惡友之奉事其心也治
常中獲之也賢仁念民念
司之好倭人之中情也秋怒
貧乏之悲也聖聖相謂書

之若誠下其勉也好猶已友
好方我則善也賢念之但切
之避強勿撰於人乞只不一
也乞惡友謂事之而相守一國
一那身各流念也教而法乃
精如於才一生長士之家始

古犬

以此首能之云
以申以也之故云

六月八日

曾我太郎

某

進上

梶原平三郎

正壽記清文

敬告中記法文

上枕天帝親王

大天王熾魔法

王又通冥官泰

山府君下界地

皇始天照皇太

神宮伊豆松根

富士淺間熊野

三和合峯山王

城法与福高德

園加茂寺公八攝

三所松尾平野

總而日本國大

山之神祖神法

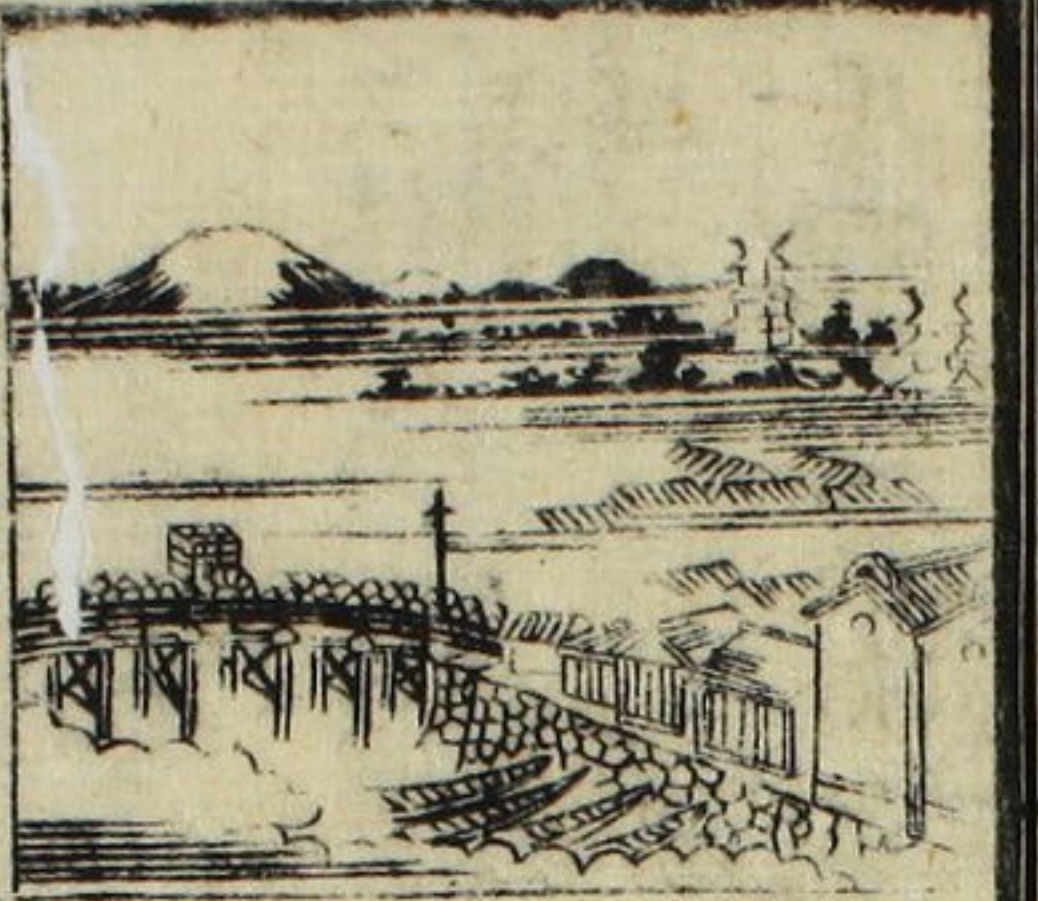
醫官道神氏

合我之然心志者之嫌人由名
拘我之誠意之先之知我之者
吾若貴賤那集牙則下云
吾隨招法合疎云云今也當時
已仍之知云云也德門之者
市之禮云云之無理非之者云

且其下下之運之合及民謀
略也其神也神也歎悲族也
披其肩有之雲也持門也仍
城能之分別の以也下之根
任古人之金云云之波憲法也
法為之君令大取日月之

神全正多...
 此...
 云...
 世...
 真...
 文如件
 正尊

文治元年九月
 楠正成金剛山
 居間之...書



唯一今日...
 万病生...
 一理...
 思...

如照...
 近...
 垂...
 下...

唯...
 惟...
 捨...
 義...
 乃...
 令...

一人を我の心深く
 して人に務らん
 事と思入難く
 一才以て慶しむ
 人の慈みする
 と知るまじ
 上に漏るひ下
 と昇しむ
 一程一人に残る
 我身は非あふ
 をこのたりと云

一和紙に心ゆく
 莊に肉めは
 邪心と合ふ
 一欲心熾くして
 ころろに教
 亂るる
 一吾紙作とて
 心のはたけ
 方たあふ言と
 かなはる言に似
 されども悪道

果ては道と科才一忠不
 右能分別の言の書書
 考要也其書之働操私用
 弓馬之道其器用而不技
 持人教之業定し而然其
 論は法家人自先規規乃

分随其相坐を肉之依主
 人持振威勢安んじ其生
 下知合戦の法に成る持
 共士ふ恥ふ命の物激論て
 得て身も何れも書如得
 永享元年己九月十日

一人乃善哉
 心此中ひふ
 已が邪と云
 して抽れ及
 を知る
 一怒りも
 一昨一電
 一六非と云
 一國の為法人
 一怨ゆるこ
 一禁び

一我が仇あり
 一執せんとの
 一形
 一珍信も毎
 一血を味
 一遊も度
 一此ハ染ま
 一をて
 一毛と
 一膽情の馬
 一何やせん

初登出書
 有奈新者不
 其故如何初
 之酒如何志
 如人の軍之
 多勢直机者
 者打物如太
 女浮若事平
 悪今勢情能
 子粒山万事
 か天下知
 頃新着奈
 敵持事

者打物如太
 女浮若事平
 悪今勢情能
 子粒山万事
 か天下知
 頃新着奈
 敵持事

寸をうりぬきて
きりけりまは
足はあはれを以
て来ると

一太刀を背に
切まるとりて

一好まきまは
とほむれを以

一澄地六札の吉
と度とと必は
毛を晴かへすと

一時にほひあは
おと風知くは
偏小直して

かひて石をさ
人皇三十一代

敏達天皇代

正孫左大臣橘
綱房橘見公孫

楠判官多門保

正成 麴

ふも若来はての面員又も習

学問女人も守る必しも同也

打刺の習も習取現為之衆

下志切也依之文字立く勵努力

才短氣能務人者諸人貴之

貴短命短命并深ふ形も活花

士孫方室の行の任も若之若

亦和疎字も不用の輩も其身

計非能辱も即返父母腐名

也自閑老来は悔も方之初

稚の時高師命も志親も未

練牙も此下寺も不学も字も文

古状

百官名盡

左政大臣

右大臣

左大臣

右大臣

大納言

中納言

宰相

中將

少將

四品

諸吏

中勢

式部

兵部

刑部

宮内

大藏

内苑

圖書

縫殿

内記

外紀

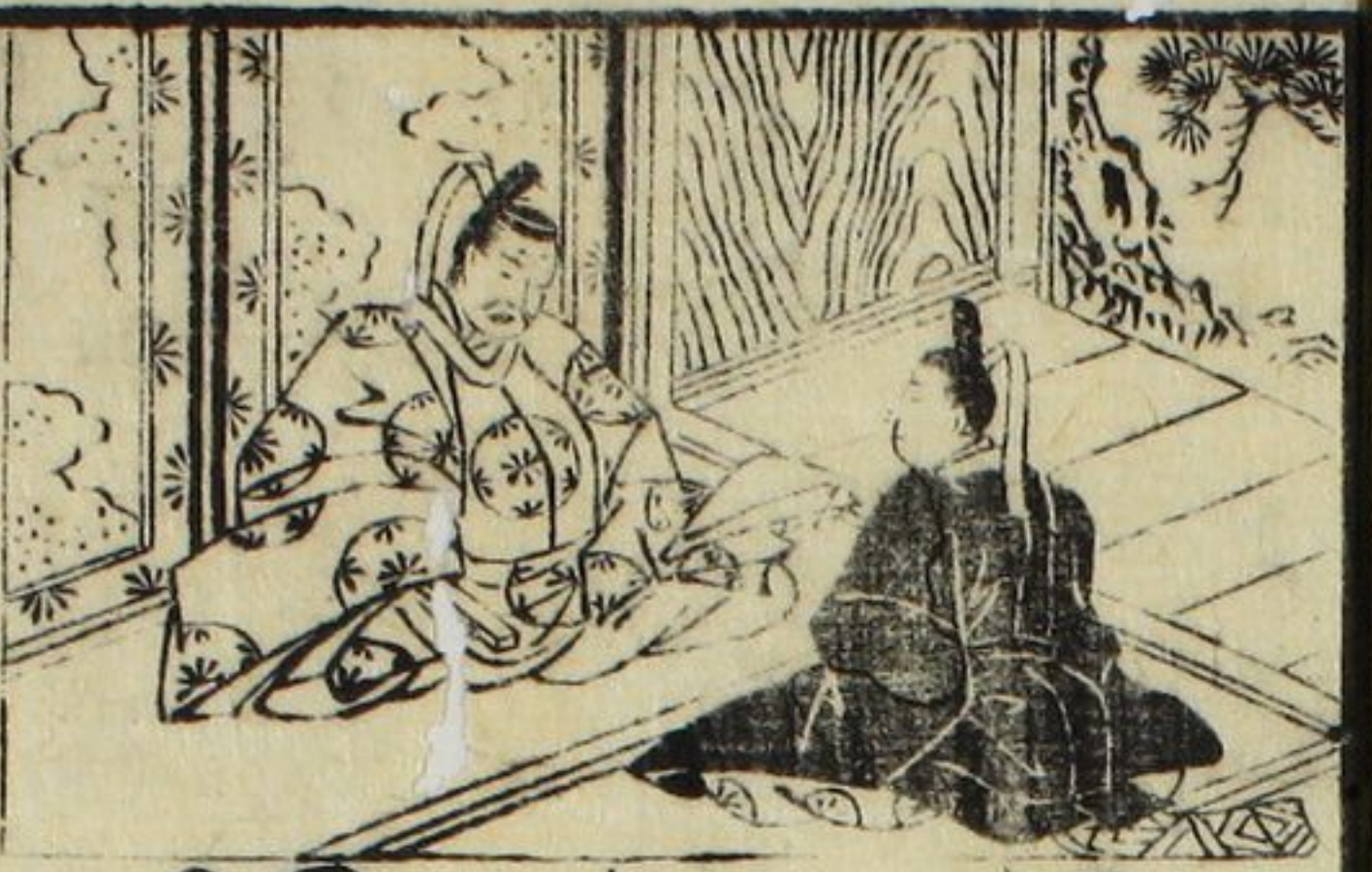
監物

舍人

内匠

大學

雅樂



此等實山室如也乃金玉之
花能如每府赤面至極其
才智故和心受方人排待之
物又向歎陳武士猛病才一而
逃食我場者其能守一胡之間
難遊程實自能共家共不飲

安身古者為務求其
立法今先途主務同念我
習是以同中歎如初學初心
兒童未先求以理拋方事之
致為務當當也於達文武三
道者揚名於天下歌德和四海

右門	因獄	治部	物集女	東百官	鞆負	帯刀	勘留	主掃	采女	大膳	右衛門	右馬	右京	兵庫	將監	大炊	織部	集人	主計
左中	左門	右衛	民部	百官	百負	右人	市正	主馬	彈正	主水	左衛	左馬	左京	木工	木工	掃部	主殿	玄蕃	主税

有身習志能成下之學上右
 未代名今事大膳正執事
 之少者有禮乃為能若
 也仍及刻書如件

腰越狀

源義經公事上之...

撥沖代友其為勅宣之使
 傾朝敵眾伐以笑之
 會我首能奪其上仍建賞処思
 外依虎口獲之云然出書其大之
 勳功義經公把為最答後之
 功無得最出勳字之同之沈紅

丹礼	此面	左治	得集院	志海	梅于	新文	一学	丹美	平学	要人	右指	野母	久言	丹下	东言	波门	浪江	右月	右中	
典礼	丹願	右治	雲林院	左治	主冷	典指	矢插	相馬	平学	多門	小指	左指	久米	求言	伴織	平馬	清士	清源	仲	左月

波信業事忘必業者若以之言
 延年先之固然至以後者實
 吾老入種拿中間不能忘志
 浪遠救目當以耐承身詳然
 故貴肉同胞之儀院絕宿運極
 聖君亦世之業周不感此也

式奈古亡父者身其再証
 源之雅命披恩定之非款何
 聖業如憐子新中狀持似
 李德美德安分新故友膚於
 父母之親我因古以敬也他
 界之同我孤抱母情中後卦翁

形馬	士願	外學	生柄	僧官	之名	律師	相當位	僧都	同	法橋	上人の位	法眼	和尚の位	法印	和尚の位	持僧	寺藏に準	正僧	中僧に準	大僧	正僧に準
----	----	----	----	----	----	----	-----	----	---	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------	----	------

大日本國盡

倭豆	那三	相摸	那八	遠江	那十	志摩	那二	尾張	那八	倭質	那四	倭幣	那十	東海道	十五國	攝津	那三	河内	那六	和泉	那三	山城	那八	大和	那六	五畿	同	五畿	同
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	---	----	---

國字多郡訪以牧豎一月行時
 瘡安地思苦難變改存余京
 於禮道難治之間諸法全流約
 在之而德氏柄者去遠法之服
 使民百姓本然之幸考又忽純
 熱白為追得平家之一族

今上浴在命先誅賊本者我
 仲後而責負能平氏或財之俄々
 嚴之第本駿馬為敵不顧亡
 余或財法之大海後風波難
 不痛沉為利海底掛繫於鍊
 親之胆加之為枕甲團圓之為

武藏那廿一 安房那廿二	上総那十一 下総那十三	常陸那十二	東山道八ヶ國	近江那十一 美濃那十八	飛騨那十二 信濃那十一	上野那十二 下野那九	陸奥那十一 出羽那十二	北陸道七ヶ國	若狭那三 越前那十一	加賀那十二 能登那十三	越中那十四 越後那七	佐渡那三	山陰道八ヶ國	丹波那六 丹後那八	但馬那八 因幡那七	伯耆那六 出雲那十	石見那六 隱岐那十	山陽道八ヶ國	播磨那七 美作那七	備前那十一 備中那九	伎後那八 安藝那八
----------------	----------------	-------	--------	----------------	----------------	---------------	----------------	--------	---------------	----------------	---------------	------	--------	--------------	--------------	--------------	--------------	--------	--------------	---------------	--------------

為業在之信欲乘休亡魂
 對快之外云化子刺義經
 補任之役尉奈為家之面目
 希代重職何事如之平陸統
 今悲涼歎切也因茲法古諸
 社牛王室不重教不擇我公為
 奉法誓之日本常守卒勝列
 太心神祇冥乃改書為教
 通之起法文行安之信宮先文
 我國者神宗也當集神非礼
 聖觀非他備清及廣太之信位
 茲悲何復宜其今達高國也

廿四

周防六長門六
 南海道六
 紀伊七
 河内九
 伊豫七
 西海道七
 筑前八
 肥前八
 日向八
 薩摩七

餘計二
 已上六十八州

永字の八法

側
 勅
 策
 掠
 永
 勢
 趨

八法六に側二に勅
 二に勢四に趨六に策
 六に掠七に勢八に
 勢九に勢一に勢八に
 勢九に勢一に勢八に
 七十二點とある

餘計後世誤る能き先者種
 昔餘考及家門傳業記永
 子孫仍開身其愁眉以弱
 安寧之憂多紙併合者 equal
 德事仍涉實其若性禮云
 元曆二年寅月 源義經

進上因情守教

○義經合状

謹白抑義經未於檢出清和
 之春後後多由滿仲勢云
 上備德以清盛打極多去遠
 因後後七民百姓未清和因

諸人得意草

丈人の世小ある南蠻
世界の和合と云ふ
すのあり其和合を
よくせむに致りし先
程程といふは程と
せむは備ふ和合は
すのあり其和合を
よくせむに致りし先
程程といふは程と
せむは備ふ和合は

所も行(む)たふひは皆
うちとけく和合し
言おんはむれもの形り
家業もま理いす
世理せむは實人素
實人もまかゆむす
はあれ和合ありま
人の和合たを理と
いふは手理せぬは
事此を打とけて二心
なく主人を人切に
押の六和業のむ打
とけくはあり和合
とまへんは理いす

為家之新運後獲於初運之一
威時之財也伏以我財之運
海上清風波之絶切歌道首曝
棘親之胆責靡言事之育北
其耳生捕大后殿父子波
本獲金源富源長命勢心

奪依棍亦決言空之然心真
太熱功親兄弟之誓思言決
侍一人是已運存存拘亦似
威世世業固似於者切
棍原父子類法子の和考理
者不之今生活世之恨万

之理せねば主人を
 ころす打てて家来
 とこれごとくゆりあは
 主人のち打てける
 かり親や男姑の子
 や嫁に身理のまは
 埋せのびるや嫁の
 うちをけくみあて
 ねのひあつひの他
 念なくまらるるや
 嫁もころすちをける
 かり子や嫁の親や
 婿へま理のまを
 埋せのび親や婿に

端道多難片巻成公傳教白
 文法家守宣月廿日義經
 進上凍右共傳教殿
 西塔衣衣坊在慶
 最期書捨一通
 於若手之時寄列於雲
 列新洲山自量取以來不
 魚目夜祖法阿傳之二字
 況至判除長實故友以偏尚
 志云之直議定時極敬密秘
 法也定府禪床信探全胎
 兩劫與形大目不之法也取

古本

明く頼母一く其
いまのやうちとけり
有り才ハ足之程
いんを程せねば
乃んまぐとく程
しく一入るまふ
まふは打とける
有り友達ハ此方
より程いんを
程せぬ程方いと
そのりくたも
程切あつくる
女をたむちとけ
と程ありそのうに

人ぐまのいん
いんを程せぬ
法なるるは
いんちとけるなり
形のとくおとけ
何のいん
星紙和合と
あり世の中
有り
まふ有る
の御代
の志あり
中

命我自母之胎也出
犯禁滅命護帝道
現為二世在懐
海難道為余約果者
抵於征夷大將軍
曹司賢仁其相之君
初孫揚由亡
新之國風承
家起揚員思既早
洛十揚也
美合浮記浦
教子拙者暗
本
虎

初孫揚由亡
新之國風承
家起揚員思既早
洛十揚也
美合浮記浦
教子拙者暗
本
虎

五

七

其のたのびやとて
 世にたのびに自體
 不ぬまより和合の
 中より事後さされ
 八身作乃指をさす
 ありさるるはゆの地
 移國の基を能
 してめらまるとは
 仁をわんや仁人
 の安宅たり勉法
 くとまむと運は彼
 安宅乃とくらむを
 とまかりらんく
 くは得のえく

五節句略故事

元日

元日年のその月日の
 けち見始され元
 平のふけ自八人の
 知とわらなるゆゑに
 影のけい事も兼ふ
 目とにわらにせんや
 とあふし今胡あめ
 とを并花水と波のひ
 べー又屋敷酒を香
 正一と名の邪氣を
 らひ福度と病すと
 又をさあてそのらに
 ゆふ人道とらて命

清暇入徳影鏡子雜子家子
 十文字端端亦終之追伏也
 君臣二世之契約年決命以來
 奉師傳の号副將軍陸之院
 ひ室約二千之國大將を運託
 一日行阿婆遂心知く女意を攝

万民射候動為追討平家
 率救万軍兵所之城野野向
 刻非屑某又供奉は夏
 者凌空と天久と若載者霜
 有陸則張魚鱗亦流母天陳
 作張出智照物冷天金上を

結城

くしてよひも優る
ゆきまといと國の
上巳

三月三日を上巳といふ
祭の月されば己と除
く日と名を稱せしむ
知るべし今日艾履
と念ふ柳を踏む春
ハ病とのぞけ初を
うらぬとらん一季の
祭のちびりしうハ
上の己の目ぬらひ
なるは念ふ上巳といふ
三日と上巳とすの事
漢の武帝よりと
すまらるること

端午

五月五日を端午といふ
まきまきともいふ今日
ちまびとこいひさる
酒とのむさるるを
あつと体治する事
大哉礼と重を加
てゆわすまのわり
かゝる風さへ一又
りるに風系五月に
目は酒をよまらんで
記をたんのあま
あまのあまを吊れ
き倍あり

七夕

七月七日あひ七夕

詠月の夜秋海國秋子約

波底掛袖繫ふ紅首推寄の汀

終日成楳木海勇古衣王遠

華野の軍車來物秋已至凶

徒責仗秋達本意之処提

東依逆樽遺恨淡者意叙

為仍亦汝實は兎才不和之者

執球之隣結句如加雪上霜

滅似胡越子年臨隨月性月

來交身之故宛然跡在の物

者之舊心削骨事同花解結丸

余多流浪園遊於乃之條由

古狀

七三

八月朔日とたのむる
九月九日と重陽又

八月朔日とたのむる
九月九日と重陽又

八月朔日とたのむる
九月九日と重陽又

路滋者去伏入道竊之時者
八二分手來柑削八角三十
三疋落枕其好我者重純
吉野織塔端被好其重純
重純者於於中園東中
初治内文長二乃名約一身

秘重阿之體身輪名張跡治
天高之踏治地厚不重之踏治
忠通者折折之折折之折折
櫻内竹台は歌陳之探尚也又
及少之露持送是披露道
舞いよ是尚也天余胡今

皇九陽九ともの巻
若陽の松ふを
ゆきよは白菊の油
とのて或は雲とて
雲は霞の軽き
若くも老とてうら
えんまより程平る
又ひらきう房は
まより菊酒とのめ
たまごこいひま
ゆきやうともひ
まより編入とて
めてるるよりれ
安らこれこれと

徳川秀乃漸子息三人係謀叛
俄君臣共化新君の柄信按
志四國戰場難云々
以今言遂身道須道有
状横倭今乃史不能上聞私
運天命也忽感流銘行云

古書初詩歌

天竺

和合樂

地祇

皆清濁

今日不知

誰汁會

去風去水

つ時来

長生殿裏

看秋富

乃乃おる飯林兼教日念
赫子里お古在深也高社
軍堂如く随致自安免
友文賢仁在二君生云保
沈子笑の面因山事秋今
今揚名方天卷贈清候

五状

不老門あらしのしんりしやふ

日月一進ひつげついつしん

柳無新力やなぎにあらたなちから

隱先劫かくれんせんせき

池有波文いけになみあり

冰意二年こおりごころふたとし

天宮代あまみやしろ

きされ石乃いしのみ

いよちとありていよちとありて

社やしろ

右ノ通の月夜ノ奇ノ秘感也

文治二年閏四月廿七日

熊谷道状

直實様御言不為奉奉

會し君は其王勾踐我持

秦皇漢高丹怒來秋決揚

負却俄忘然歎思速拋衣

忘勇還而秦加守權如後

雲去履亦勢來成落死道

時強乘實背凍氏始の強来事家

彼者多勢是若無勢也極冷

却の情養由為子守安事

七夕前詩歌たなばたのうた

憶得少年おもひえたるせうねんの

長乞巧ながいこころ

竹竿頭上たけのぼうのうへ

預練多あそびごと

古状

去夜残浪
 宿烟
 夕烟
 月欲消
 洞花激波
 心欲行月
 今宵织女
 渡天河
 一似
 似羅

適逢生也子馬家短深溪西
 翻然歎難寬缺事隆江平
 云双名救此想成雷燭炬
 集如为后立車然引弓放矣
 拔劍築楸集命於因方沉
 名於為海之流事自化以非

天の川とて
 今宵の
 夕の
 月
 渡
 天河
 一
 似
 似羅

家而因式就中其亦は君之
 以謀意短唯下給以命出更之
 奉以善提也由類也命之同
 亦以也相沈也首結牛狀也痛
 式以君之也其有也思縁也生
 八宿縁其深春也思縁也生

男女姓名

木 文 樹 茂

平 米 門 餘

義 德 郊 兵

茂 梅 百 馬

火 助 覺 俄

久 角 九 吉

考 嘉 若 虎

歲 祇 定 金

士 忠 義 右

傳 長 德 六

金 伴 幸 森

字 友 安 然

乙 又 恒 笑

好 志 為 櫻

水 治 七 市

新 善 澤 佐

宗 甚 庄 三

小 勝 四 作

初 政 松 終

右 推 生 名 加 文

德是兆送緣何半切生死世

成蓮身還為至至以緣式統

則不深居地宜奉帛出善

挖者之聖聖中狀實吾後國

實其隱者是以法執統之淺

可有報報者為藏之禮云

步承三言二月日丹治雲雲

進上修實車內在樂射殿

徑盛盛返狀

今月七日於橋別一谷之討

數盛死骸舟車之物送給年

和和古鄉各從漂西海波上

謠名寄文章

治政時代の事
しそて八雲の波
も静てそ岩の戸
出さうらふはとま
のさす
好瑞の梅初春
く四方の事沈
わーはふ光り
か層くそ乃井
老をのみそらぬ
舟き
無遠く去る松



が枝操河はり
あらし
あすのさす
よく人松風を
ふつふとそい
ゆる海舟も
すーははる川

穿たる運命事始る非ざる
又在戰場上何二度と海より
武生者必滅様云留老あ不
定當之事現れ成親女子の
前世契約所釈者い子羅
唯難者若出活想身捨死

粒必死況於底下向地比史
式控者去七日後打立朝云
今日夕追其伴未離身燕
来随物其其後函局又知
花汝道者信然之付由
從取未及更音同何風便

いまはさうのまは
 杜若の如女がのみ
 き風まうして秋
 を就因忠紅紫
 指指授かゆや
 女節のまふゆの
 うせい 邯鄲の
 榮花のほきね
 君が代乃かなれ
 のと集れられ
 あらゆるに角

田川ののち胡也
 登之と老松白
 鬢のろろふ美
 姉くんよれむ
 乃幕号指を
 おそれまは目か
 よれやひかき
 錦木や天龍
 考をさゆし音
 知る小うこれ拍
 子くははしと

聞其音後信天
 地奉以搖
 絲於信感慈如
 七目内均
 凡彼死體是則
 与信天聖德
 聞因信不語新
 外感淚増之
 信心後神生
 二度如故来
 又是即因信
 持非也四芳

恩者幸得見
 式一風雲塔
 捨况お然歎
 入約信流の胡古
 今未支其存
 貴因考果須
 心山
 願下考母津
 奉養海邊の
 淡色剛
 之未來永
 追慕給色
 去遠方
 端臨の程
 是皆紙保
 奉之海云

夕のほふ江の
君や揚を妃名
舞の羽衣ま
かつ肌を右
迎む神元之
瑞清神元之
の歌をせあそ
むるハ勢請を
きも教をよあ
そひくさあ

あふ百弟の
さだ不園を
里粉洞とる
とを山前
さにかと
とまより
うけさ
れさハ
多足
丁

宿文事
何

壽永三年二月十四日

熊谷次郎友

大坂進状

今度又為行相市案案数
越山越一夷之同公利抱
浪人等用其其公就中

先年秀頼の中如首治
勅送其江家信在江
移問就上渡列吉野合
街頭山國西之進拂諸
中全如生捕石國治
亦渡京如雪王承命

古犬

品物異名抄

弓 越轉魚腸

弓 轉魚腸

如 洗羅衫軍

如 洗羅衫軍

如 洗羅衫軍

如 洗羅衫軍

如 洗羅衫軍

如 洗羅衫軍

如 洗羅衫軍

如 洗羅衫軍

如 洗羅衫軍

如 洗羅衫軍

如 洗羅衫軍

如 洗羅衫軍

如 洗羅衫軍

如 洗羅衫軍

如 洗羅衫軍

如 洗羅衫軍

如 洗羅衫軍

如 洗羅衫軍

辱其刻正河果知大倫教也

故其内縁者同助亦立並出也

還の念謀教事端以介如愛立

車維法一城織綢字唐感湯天

雖為龍驤馬産及出陳者

即阿踏落刻考教首事也

田陸作之決之

谷又長十九年

大野之馬屋

同法状

芳平世合教其作四被修成

粒教之執脚一取引考也

菴素虎斑

墨鶴尾海墨洞

墨洞

雙溪前發狸毛

墨洞

松腹玄雲酒池

松心麻刺媒

蠟液方潔溪液

白麻捲兒竹帛

如 洗羅衫軍

如 洗羅衫軍

如 洗羅衫軍

如 洗羅衫軍

九花白羽九花白羽
 國翼蝶紙冰紙國翼蝶紙冰紙
 亦雪改亦雪改
 猿声猿声
 過雲柯亭過雲柯亭
 寶箱寶箱
 引方引方
 桐絲桐絲
 素桐素桐

拙為父大谷秀教及十歲
 天下可相渡之日本德名
 教在之起請文上山事不
 有紛山德名又先自石因德
 小補身之以此是隨處亦
 運而不遂本全其決也矣

杖杖
 枝老枝老
 古紫古紫
 虹霓虹霓
 榭榭
 蝶蝶蝶蝶
 子石子石
 芝皓芝皓
 古居古居
 匕首匕首
 榭榭

見世謂山刻秀教送心極密
 何切少之知別心式倚
 表畫信於代未也亦大圖忘
 厚恩秀教亦究以今國教
 孤今又之討果之念秀是也
 國城之請日本榭切事可

豊 懐六 河津
 望 鳴落 敗天
 慶 乃危 高板
 玲 控馬 風集
 丁 尚 帳 帳
 金 繁 厚 皇 灯
 丹 丹 水 雲
 海 海 水 鶴 右
 異 名 抄 大 尾

孝子可為面目若閑白竹天
 之心理作神三寶之烟受之
 父子之露命可危者也於
 斯一戰之否以必之禮云
 慶長十九年 秀為殿
 古状描九轉終

士
 士のうきとせとせ
 めて民をゆりし
 権とをこそせ
 しく我威とを
 せせしん

庭訓往来寺子寶 全 御家流
 女今川 全
 庭訓往来大貫道 全 大橋都往来 石摺 全
 新刊頭書

農
 養の百姓のみ
 冬司官細とう
 やまひまき 秋
 冬のものわ私を
 く耕他をわん
 二ましん

庭訓往来繪詳解 全 武者周榮筆
 古画要覽 全
 頭書繪抄假名付

工
 工の職人なり一切
 の細人なり
 に油ひかり
 ひかりを
 二ましん

草木育種 灌園岩崎先生著 大本全三冊
 文政十戊子年求板
 天保四癸巳年再板
 江戸日本橋通貳町目

商
 商のわん
 高のわん
 分とを
 二ましん

書林 玉山堂 山城屋佐兵衛

